

## 児童の姿を共通理解することから始める

### 特別支援教育コーディネーターの取組

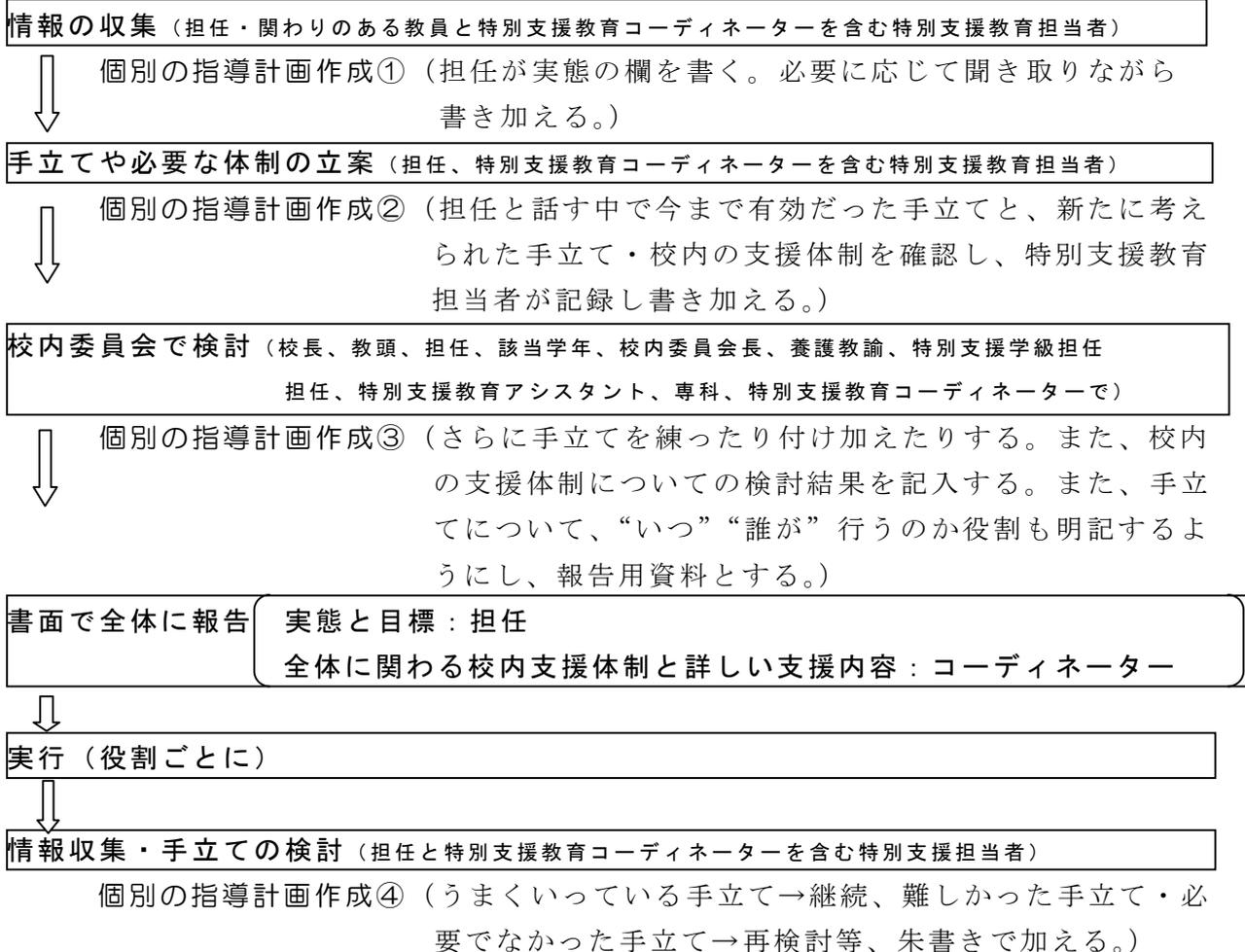
本校は、通常の学級が18学級、特別支援学級が4学級、通級指導教室3教室からなる中規模校である。大半の学級が交流学級となっており、どの児童も特別な教育的支援を必要とする児童と日常的に関わりあえる環境にある。また、通常の学級の中にも支援を要する児童が多く生活している。

4月当初、特別な教育的支援を必要とする児童に対して関わる大人の対応が様々なために児童が混乱している状況があった。そのため、全教職員の共通理解のもと支援が実行できるようにするための取組を挙げていく。

#### 1 校内支援体制づくりの手順

以下の手順で個別の指導計画を作成し、具体的な児童への支援内容や校内体制を整理していくようにした。

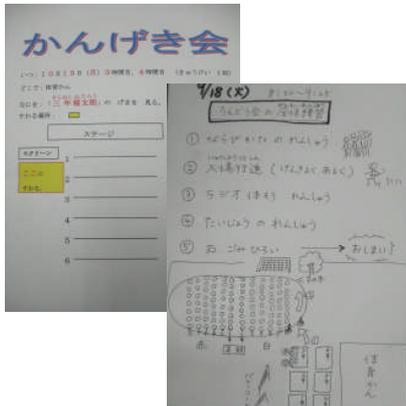
##### (1) 個別の指導計画作成（※資料1）に関わって



## (2) 教室にいたることができず、外へ飛び出してしまふA児への手立て

A児はじっとしておくことの苦手な児童である。週に1時間通級指導教室に通っている。以下のことは個別の指導計画に明記し校内の教職員に伝えながら取り組んだ一端である。

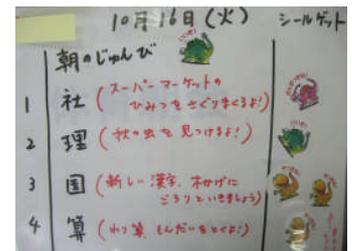
### ○手立て1…集会場面に参加できるように（担任・通級担当者 ↔ 児童 ↔ 保護者）



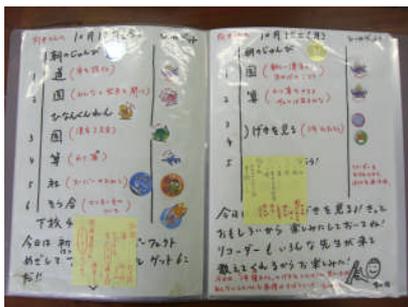
本校は、週に1回程度全児童が集まる機会がある。集会場面にはほとんど参加していなかったA児に、前日までに集会の内容と並ぶ場所について簡単に紙に書いて知らせるようにしてきた。家にも持って帰り保護者からも伝えてもらうようにした。最初は“体育館に行く”ということから目標にし、できていることをみんなで見守るようにした。少しずつ段階を追って参加できるようになってきた。今では自分からクラスの列に入ることができるようになり、座って参加することが定着してきた。

### ○手立て2…スケジュールで1日の見通しを持つ（児童 ↔ 担任 ↔ コーディネーター）

担任が、毎朝A児に1日の時間割と簡単な内容を紙に書いて示すようにしている。1時間の中で参加できることがあったときにはシールを貼るようにし、がんばったことを目に見える形で残るようにした。帰るときには担任からの温かいコメントも記されている。シールやコメントを励みに参加しようとする場面が増えてきた。



### ○連携…保護者にも褒められる機会を（コーディネーター ↔ 担任 ↔ 児童 ↔ 保護者）



両親のことが大好きなA児が家庭でも褒めてもらえるという励みになるだろうと考え、スケジュールを持ち帰るようにした。家庭でA児のがんばりを肯定的に捉えてもらえるように、事前に今の段階でA児が目標としていることを伝え、必ず褒めてもらうようにした。また、A児のがんばりの過程・変化が捉えやすいように、ファイルに綴じていくことにした。これらの取り組みで、約束ど

おり家でも学校と同じように褒めてもらえ、少しずつではあるが着実に参加できる授業が増えていった。

### ○校内体制…A児へ一貫した対応の取れる体制作り（コーディネーター ↔ 校内）

A児は教室外に出てしまうことがあったので、校内で見かけた者は教室や職員室に校内電話で連絡を入れ確実に居場所が分かるようにした。またA児の今の具体的な行動目標（体育館ロビーで本を持ち込んで集会に参加できる等）や対応するときの具体的な対応や言葉掛けの方法を全体で確認するようにした。どの場面でも見かけた教師が共通理解を持ってA児に温かい言葉がけや促し・見守りができ、不必要な対応が減った。教室

以外の場面でもA児が落ち着いて活動できることが増えてきた。

児童を取り巻く環境を適切にとらえ支援体制が機能するようになっていくことが、児童を大きく支えることになった。支援によって子どもは少しずつではあるが着実に変化していった。変化の様子は担任やコーディネーターから全体に報告していくようにした。

## 2 支援体制づくりのポイント

支援体制を作っていく過程で、次の3つのことが大切であると実感した。

- ・児童の具体的な姿に立ち返ること。
- ・できるだけ校内委員会の中でアイデアが考え出されること。
- ・支援内容や役割をはっきりさせ、それが全体に分かるようにすること。

限られた時間の中で多くの人間が集まり校内委員会を持つからには、対象の児童の情報や会議中に決めるべきことを整理したうえで進めなければならない。そのうえで「明日からやってみよう。」と動き出せるものを1つでも生み出さなければならない。初めは、校内委員会を進める前はかなり細かく段取りをする必要があり、会議中は意見が出にくく特別支援教育担当者が引っ張っていく場面が多かった。しかし回数を重ねていく中で、会議の中で少しずつ建設的な質問や投げかけ、意見などがいろいろな立場から出されるようになってきた。児童に関わる大人がそれぞれの児童の見方を出し合い、支援の在り方を考えるという過程そのものにとっても意味があると感じた。また、そのベースには、児童の具体的な姿がみんなの共通なものになっている必要がある。個別の指導計画を活用しながら児童の“今できていること”に目を向け、学校全体で児童を支えていく体制ができるよう努めていきたい。

※資料 1 個別の指導計画の書式

個別の指導計画

年 組 児童名 ( ) 担任 ( )	年 月 日 作成
--------------------	----------

(児童の興味・関心・長所)					
(担任の願い)					
(保護者の願い)					
	教科等	本 児 の 実 態	目 標	支援・手立て (誰が・いつ・何を)	評価
学 習	国語				
	算数				
	生活				
	図画工作				
	音楽				
	体育				
	全般				
生 活	登校				
	休憩時間				
	給食				
	放課後				
	下校				
	集会				
	友達関係				
	家庭・地域				
(本児への基本的な関わり方)					
(支援体制)					
(連携)					